

おはようございます。2学期も本日で終了しますが、今日はクリスマスイブですね。そこで、皆さんに一つ質問をしてみたいと思います。「サンタクロースは本当にいるの？」と聞かれたら、皆さんは何て答えますか。

実は、今から100年以上前ですが、アメリカの大手新聞社にこれと同じ質問をした少女がいました。今日は、そのお話を紹介します。

1897年のある日、アメリカ・ニューヨークの新聞社ニューヨーク・サンに8歳の女の子バージニアから投書が届きました。内容は、「私は八つです。私の友達に『サンタクロースなんていないんだ』って言っている子がいます。パパに聞いたら、『サン新聞社に問い合わせさせてごらん。新聞社でサンタクロースがいるというのなら、そりゃもう確かにいるんだろうよ』と言いました。ですから、お願いします。教えてください。サンタクロースって本当にいるんでしょうか？」というものでした。いくら、お父さんが困ったからといって、新聞社に振るのはいかななものかと思います。今の時代だったら相手にされないかもしれませんが、昔はおおらかさや温かさがあり、8歳の投書に、大新聞の社説欄で回答しています。その内容は、「バージニア、おこたえします。サンタクロースなんていないんだという、あなたのお友達は間違っています。きっと、その子の心には、今はやりのなんでも疑ってかかる疑り屋根性というものが、しみ込んでいるのでしょう。疑り屋は目に見えるものしか信じません。(中略) そうです、バージニア。サンタクロースがいるというのは、決して嘘ではありません。この世の中に愛する人への思いやりや真心があるのと同じように、サンタクロースも確かにいるのです。(中略) もしも、サンタクロースがいなかったら、この世はどんなに暗く、寂しいことでしょう。あなたのようなかわいら

しい子供のいない世界が考えられないのと同じように、サンタクロースのいない世界なんて想像もできません。

サンタクロースがいなければ、人生の苦しみを和らげてくれる子供らしい信頼も、詩も、ロマンスもなくなってしまうでしょうし、私たち人間の味わう喜びは、ただ目に見えるもの、手で触れるもの、感じるものだけになってしまうでしょう。(中略) サンタクロースを見た人はいません。けれどもそれはサンタクロースがいないという証明にはならないのです。この世界で一番確かなこと、それは子供の目にも、大人の目にも見えないのですから」途中は略しましたが、大方このようなものでした。

この社説は、私たちに二つのことを問い掛けていると思います。一つは、物が存在するということはいったい何なのだろうということです。物事の存在には2種類のものがあります。このマイクのように目で見たり、手に触ったりしてその存在を確かめることのできる存在がまずあります。しかし、世の中に存在しているものは、すべて見たり、触れたりできるものとは限りません。夢や希望、そして友情や愛情などの精神的な存在は、目や肌で確かめることができないものです。しかし、できないからといって存在していないとは言えません。むしろ、目や肌で確かめることができない物の方が大切なものであるとも言えます。このように、サンタクロースは視覚ではなく、いわば心の目で確かめられるものという考え方が、この社説では主張されています。

もう一つは、サンタクロースは何も赤い帽子と洋服をまとい、髭を伸ばして長靴を履いたおじいさんというばかりではない。子供たちに夢や希望を与えてくれる存在であり、悩んだり、苦しんだりしている人の心をなごませてくれる存在はすべて

サンタクロースだということです。この意味では、誰でもサンタクロースになることができる、ということと言いたかったのではないのでしょうか。

アメリカもトランプ政権になって様々な問題を抱えているようですが、この社説が掲載されて100年以上たった今でも、クリスマス前になるとこの社説が語り継がれているそうです。

皆さんは、この話を聴いてどのように感じましたか。私たち大人が、そしてもうすぐ大人になる皆さんが、小さな子供たちのサンタクロースになりえているのでしょうか。世の中が豊かになり、便利になってAIやロボットが人の代わりに働いてくれるような今の時代に、最も必要なのはサンタクロースかもしれませんね。

先ほどの社説の最後にはこんなことが書かれていました。「目に見えぬ、輝かしい世界への幕を開けられるのは、信じる心、想像力、詩、愛、夢見る気持ちだけです。」

さて、もうすぐ新しい年が始まります。年の変わり目に、普段忘れがちなこれらの事柄について考え、新しい年をどのように送るか考えてみましょう。皆さんにとって来年が良い年であることを願って、2学期の締めくくりとします。